

村上龍論
- 破壊から希望へ -

高杉 真文

村上龍は、1976年に『限りなく透明に近いブルー』で群像新人文学賞、芥川賞を受賞し、作家としてデビューした。その後、1980年『コインロッカー・ベイビーズ』で野間文芸新人賞、1996年『村上龍映画小説集』で平林たい子賞、1998年『イン ザ・ミソスープ』で読売文学賞、2000年『共生虫』で谷崎潤一郎賞、2005年『半島を出よ』で毎日出版文化賞、野間文芸賞を受賞するなど、数多くの作品を世に出すだけでなく、作家として評価され続けてきた人物である。

村上龍の作品には「破壊」を志向する作品が多い。『コインロッカー・ベイビーズ』、『イン ザ・ミソスープ』など様々な作品を通して「破壊」を描いてきた。しかし、『共生虫』のあとがきにおいて、「この作品の最終章を書いているとき、希望について考えた。小説の最終部分を書いていてそんなことを考えたのは始めてのことだった」と述べている。「破壊」を追い求めていた村上龍が新たに模索し始めた「希望」とは何なのか、どのように考えが変化していったのかを本論文では考察し、論じた。

第一章では、村上龍の故郷である佐世保や浪人時代を過ごした福生という、在日アメリカ軍基地の近くで生活していたことが「破壊」を求める思想にどのような影響を与えたかを探るため、福生での生活を描いたとされる『限りなく透明に近いブルー』、佐世保での高校生活を半自伝的に書いた『69 sixty nine』（87年）を取り上げて論じた。

第二章では、まず村上龍の「ドラッグ」への考えから「破壊」の対象には個人と共同体があるということを論じた。さらに、個人を対象とした「破壊」として「SM」と「殺人」について、その意味するところを『エクスタシー』（93年）、『ピアッシング』（94年）、『イン ザ・ミソスープ』などから探った。

第三章では、共同体の「破壊」というテーマを追究した。そして、『コインロッカー・ベイビーズ』での積極的な「破壊」と、『昭和歌謡大全集』（94年）や『共生虫』での責任を放棄したかのような「破壊」に注目し、なぜそのような違いが生じたのかを考察した。

第四章では、「破壊」ではない新たな道を探し出した村上龍の葛藤や変化について『愛と幻想のファシズム』（87年）や『KYOKO』（95年）を用いて論じた。

第五章では、『希望の国のエクソダス』（00年）、『最後の家族』（01年）、『半島を出よ』から村上龍の探し出した「希望」について論考した。そして、その「希望」とは、共同体から「自立すること」、また「自分が何をすればいいのか真剣に考えること」の先にあるのだと結論づけた。

村上龍は、「破壊」を描くことで日本の社会への危機感を示してきた作家である。その村上龍が「希望」を追い求めるようになったのは、作品を「情報」として読者に伝えるためには「破壊」では限界があるという考えに至ったからだと思われる。村上龍の「破壊」から「希望」への道を探るということは、村上龍という一人の作家の進化を追っていくということでもあるのだ。

（指導教員 黒古一夫）